

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題B】体育・スポーツ・健康科学は、学校保健体育の進展にいかに関与できるか

📅 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:30 📍 2206教室(教育研究棟 2街区 2階 2206)

[2a704-06] 学校保健体育研究部会【課題B】口頭発表④

座長:木島 章文(山梨大学)

13:30 ~ 13:50

[学校保健体育-B-10]

大学生を対象にした〈開脚とび〉の指導に関する事例研究（コ,教）
運動の先取りを促す用具の工夫に着目して

*仲宗根 森敦^{1,2} (1. 東京学芸大学、2. 筑波大学大学院人間総合科学学術院)

13:50 ~ 14:10

[学校保健体育-B-11]

器械運動の評価方法に関する基礎研究（発,測,コ,教）
側転の評価に関する一考察

*田中 光¹ (1. 流通経済大学)

14:10 ~ 14:30

[学校保健体育-B-12]

学年および跳び箱の高さが開脚跳びの動作達成度と与える影響（発,測,教）
小学校中学年児童の縦断データを用いた検討

*佐野 孝¹、上田 恵子²、國土 将平¹ (1. 中京大学スポーツ科学部、2. 畿央大学教育学部)

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題B】体育・スポーツ・健康科学は、学校保健体育の進展にいかに関与できるか

📅 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:30 📍 2206教室(教育研究棟 2街区 2階 2206)

[2a704-06] 学校保健体育研究部会【課題B】口頭発表④

座長:木島 章文(山梨大学)

13:30 ~ 13:50

[学校保健体育-B-10] 大学生を対象にした〈開脚とび〉の指導に関する事例研究
(コ,教)

運動の先取りを促す用具の工夫に着目して

*仲宗根 森敦^{1,2} (1. 東京学芸大学、2. 筑波大学大学院人間総合科学学術院)

本研究では、跳び箱運動における〈開脚とび〉の習得を促した指導事例の報告をする。対象はサッカーを専門としてきた男子学生である。跳び箱運動の経験が乏しく、指導当初は〈開脚とび〉を試みても着手で動作を止めてしまう様子が観察された。運動経過からは、着手技術の不足と運動投企の未形成が課題であると考えられた。そこで、本指導では跳び箱を斜めに設置し、着地地点が見えるように工夫するなど段階的な練習を導入した。結果として、着手局面から着地に至る運動の見通しが得られ、最終的に縦置き跳び箱を跳び越えることが可能となった。本事例からは、終末局面を先に体験させる指導の有効性、用具の使用法における創意工夫の必要性が示唆された。また、片足踏切や片手荷重といった未熟な動作も、運動発達の一段階として肯定的に捉え直すことができる。初心者指導においては、特に安全に着地できるようにすること、それを見据えた着手と着地の確保、発達特性を踏まえた段階的指導が重要であることを示すことができた。

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題B】体育・スポーツ・健康科学は、学校保健体育の進展にいかに関与できるか

📅 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:30 📍 2206教室(教育研究棟 2街区 2階 2206)

[2a704-06] 学校保健体育研究部会【課題B】口頭発表④

座長:木島 章文(山梨大学)

13:50 ~ 14:10

[学校保健体育-B-11] 器械運動の評価方法に関する基礎研究（発,測,コ,教）

側転の評価に関する一考察

*田中 光¹ (1. 流通経済大学)

本研究の目的は、器械運動の評価方法を模索することであり、側転の新たな評価の方向性を探ってみた。仙台市の3つの小学校の1年生～3年生合計200名を対象に側転の練習とループリック形式で作成した「側転ループリック評価アンケート調査」を実施した。仙台市の体育科の評価においては、概ね「知識・技能」、「思考・判断・表現」、「主体的に学習に取り組む態度」のそれぞれに関して、「よくできた」、「できた」、「頑張ろう」の3段階で評価している。ただし、通知表（通信表・通信票など）の作成は義務ではなく、あくまでも児童の学習状況を保護者に伝えるものであり、作成の義務があるのは「指導要録」である。指導要録は、「知識・技能」、「思考・判断・表現」、「主体的に学習に取り組む態度」の3つの観点別評価があり、学校で作成している通知表も上記3点を評価し、保護者へ伝えている。「知識・技能」は、健康や安全についての正しい知識や運動の基本的な動きや技能を身に付けているかなどを評価、「思考・判断・表現」は、運動や健康について自分の課題を見つけ解決方法を考えて友達に伝えているかなどを評価、「主体的に学習に取り組む態度」は、進んで運動を楽しんだり、ルールを守り仲間と協力して運動しているかなどを評価している。体育の評価は、技能評価はさておき、明確な基準が定まっていないことや「見える化」が進んでいないことが問題点の一つと考えられる。

今回実施した「側転ループリック評価」に改善を重ねれば、特に「思考・判断・表現」と「主体的に学習に取り組む態度」の評価観点において、授業に取り組む姿勢や態度を「見える化」「定量化」することで判断基準や判断材料が明確となるのではないかと考える。

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題B】体育・スポーツ・健康科学は、学校保健体育の進展にいか
かに貢献できるか

📅 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:30 📍 2206教室(教育研究棟 2街区 2階 2206)

[2a704-06] 学校保健体育研究部会【課題B】口頭発表④

座長:木島 章文(山梨大学)

14:10 ~ 14:30

[学校保健体育-B-12] 学年および跳び箱の高さが開脚跳びの動作達成度に与える影響（発,測,教）

小学校中学年児童の縦断データを用いた検討

*佐野 孝¹、上田 恵子²、國土 将平¹ (1. 中京大学スポーツ科学部、2. 畿央大学教育学部)

【目的】小学校中学年児童の縦断データに基づき、開脚跳びの動作達成度に対する学年の影響と各学年における跳び箱の高さの影響を検討することを目的とした。

【方法】A市立A小学校の児童117名（男子56名、女子61名）を対象に、3年生時と4年生時の1月に開脚跳びのビデオ撮影（4・5段で各2回）を行った。技の観察的評価基準（30項目）による評価を行い、各段の試技2回のうち評価合計点が高い試技を分析に用いた。得点分布に著しい偏りがある項目を除外した上で、動作得点への学年の影響を調べるため、従属変数に各項目の動作得点、独立変数に性別、学年を固定効果、対象者を変量効果に指定した混合効果順序ロジスティック回帰分析を実施し、学年の主効果が有意な項目を特定した。また、動作得点への跳び箱の高さの影響を調べるため、3年生時と4年生時において、従属変数に各項目の動作得点、独立変数に性別、跳び箱の高さを固定効果、対象者を変量効果に指定した混合効果順序ロジスティック回帰分析を実施し、跳び箱の高さの主効果が有意な項目を特定した。有意水準は5%とした。

【結果】得点分布より21項目を分析対象に選定した。動作得点に対して学年の主効果が有意であった項目は、踏み切り時の「腕の揃え」、着手時の「手の突き放し」、「肩の起こし」、「両脚の伸展保持」、離手後の「目線」と「両脚の揃え」、着地時の「腰・膝の屈曲」、「静止姿勢」であった。跳び箱の高さの主効果が有意であった項目は、3年生時で踏み切り時の「わきのしめ」、踏み切り後の「腕の投げ出し」、4年生時で踏み切り時の「自由脚の屈曲調整」、「足部の接地先取り」、「リバウンドジャンプ」、踏み切り後の「腰の上昇」であった。

【結論】学年が上がった場合、主に着手から着地に至る動作で達成度の向上がみられ、4年生時は、特に踏み切り時の弾むようなジャンプにおいて跳び箱の高さの影響がみられやすい。